

宣教師 H. B. ニューエルの日本語教師

Missionary, Horatio Bannister Newell
and his Japanese Language Teachers

竹 本 英 代

Hideyo TAKEMOTO

学校教育講座

(平成17年9月30日受理)

1. 本稿の目的

戦前における欧米人に対する日本語教育は、国内においては宣教師を対象とする教育が中心であった。1913（大正2）年に創設された日語学校は、多くの宣教師に日本語教育を提供した学校とされる¹⁾。一方、来日して日本で生活する間、学校以外のさまざまなところで日本語を学んでいた宣教師たちもいた。

筆者はこれまで、アメリカン・ボード宣教師を事例に、1890（明治23）年頃までの日本語教育の実態について分析してきた²⁾。アメリカン・ボードでは、1883（明治16）年に大阪で開催された宣教師会議を機に、日本語教育課程の組織化を派内で確立していった。アメリカン・ボードは主に京阪神を中心に伝道活動を行っていたが、宣教師のなかには地方で伝道しているものもいた。地方在住の宣教師たちは、どのようにして日本語を学習していたのであろうか。そしてどのような人物が彼らの日本語教師であったのだろうか。

本稿では、1887（明治20）年に来日し、新潟教会の第六代牧師となった H. B. ニューエル（Horatio Bannister Newell, 以下、ニューエルと略記）の *Autobiography of Rev. Horatio Bannister Newell, D. D. 1861-1943*（以下『自伝』と略記）から³⁾、地方で伝道していたニューエルが、実際にどのような日本語教師から日本語を学んでいたかを分析する。

1889（明治22）年にアメリカン・ボードは、日本語教育課程の出版委員を五名選出した。ニューエルはその委員として、1890（明治23）年まで任にあたった。ニューエルには来日後、他の男性宣教師と同じくミッションから年百ドルの日本語教師を雇うための手当が支給されていた⁴⁾。彼は『自伝』のなかに日本語教師について詳述しており、「自分の日本語教師に大変感謝している」と述べている⁵⁾。ニューエルの日本語は「割合に上手であった」とされる⁶⁾。本論文では、第一にニューエルがどのようなルートで日本語教師を雇ったのか、第二に雇われた日本語教師はどのような人物であったのかについて明らかにする。

2. ニューエルの動向と日本語教師

ニューエルは、1861年8月にアメリカメーン州のイースト・オレトンで誕生した。1879年にアーモスト大学、1884年にシカゴ神学校に入学し、1887（明治20）年9月に来日した。

竹 本 英 代

彼は、10月に新潟に到着し、翌年1月に長岡に赴任した。1892（明治25）年には長岡から新潟に移動した。1901（明治34）年に新潟第一基督教会の第六代牧師になり、1902（明治35）年までその役を務めた。1904（明治37）年7月にはいと、新潟から松山へ移動した。その後、1923（大正12）年に日本組合教会の要請で韓国の京城に赴き、1930（昭和5）年に日本に戻ってきた。『自伝』によれば、ニューエルが日本語教師とともにいた時期は、来日した1987（明治20）年から1930（昭和5）年頃までであり、休暇を除くと三十八年間である。

【表1】は、ニューエルの動向とその時期に接した日本語教師について示したものである。

【表1】ニューエルの動向と雇われた日本語教師

年	月	ニューエルの動向	日本語教師
1861	8	アメリカメーン州イースト・オレントンで誕生。	
1879		アーモスト大学に入学。（1883年卒）	
1884		シカゴ神学校に入学。（1887年卒）	
1887	9	横浜に来日	
	10	新潟	①
1888	1	長岡に赴任	①
1889	7	J.コザッドと結婚。	②
			②
1892	9	長岡から新潟へ	③
1895			⑥
1896	5	サンフランシスコ （1897年9月バンクーバー）	
1897	10	新潟	④
1899			⑤
1899	7		
1900	7		⑦
1901	1	新潟第一基督教会第六代牧師（1902年12月まで）	⑦
1904	7	新潟から松山へ	⑧
1905	4		⑨
1905		同志社の理事（1928年まで）	⑨
1906	5	帰米	
1907	6	サンフランシスコ （1908年9月まで在米）	
1913	9	帰省 （1915年8月まで）	
1922	5	帰省 （1923年9月まで）	
1923		日本組合教会の要請により朝鮮の京城へ	⑩
1930		日本へ。アメリカンボード日本ミッションの代表幹事	
1931	7	引退	
1943	8	カリフォルニアで昇天	

注：日本語教師の数字は、【表2】を参照のこと。
 参照：本井康博・西八條敬洪編『長岡教会百年史』日本キリスト教団長岡教会、65-67頁、1988年。日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年、1078頁。『新潟県大百科事典』別巻、新潟日報事業社、1977年、350-351頁。
Vinton Book, vol. I, Africa, Asia, Papal Lands Vol.IV, 1885-1910, pp.171-172. 出版年不明

ニューエルは、この間に十名の日本語教師と関わっており、教師たちの氏名は【表 2】のとおりである。

【表 2】日本語教師の名前

	『自伝』上の名前	本 名
①	Keinosuke Kato	加藤馨之助（かとう けいのすけ）
②	Reizo Ono	小野鈴蔵（おの れいぞう）
③	Suisada Omiya	大宮季貞（おおみや すえさだ）
④	Masayuki Imaizumi	今泉真幸（いまいずみ まさき）
⑤	Kwan Higuchi	樋口 貫 （ひぐち かん）
⑥	Fujio Asahina	朝比奈藤男 （あさひな ふじお）
	Fujio Nishiuchi	西内藤男（にしうち ふじお）
⑦	Yoshio Uyeda	上田義雄 （うえだ よしお）
⑧	Tadashi Tomita	富田 政 （とみた ただし）
⑨	Takeshi Agata	縣 豪 （あがた たけし）
⑩	Jutaro Yonemoto	米本重太郎（よねもと じゅうたろう）

参照：『自伝』104-115頁。

3. 日本語教師の実態

それでは、日本語教師たちはどのような人物であったのか。ニューエルの『自伝』から分析していこう。

①加藤馨之助

『自伝』の記述によれば、加藤はニューエルの最初の日本語教師であり、1887（明治20）年10月に新潟に着いてまもなく、ニューエルのもとにきたという⁷⁾。ニューエルは二年間は学校の読本を読んだり、表意文字（ひらかなと漢字）を書いたりした。そして日常会話も学んだ。加藤は1888（明治21）年1月にニューエルが長岡に移動した時にも同行し、同志社に入学するまでの1889（明治22）年の夏まで、ニューエルのもとにいた。加藤はその後、神学校を卒業し、数年間、教会の牧師をした。最後は宮崎県の延岡で少年のための私立学校を組織し、長年、校長をしたという。

以上の『自伝』の記述を他の資料とあわせて検討していこう。1887（明治20）年6月に執筆された北日本ミッシンの第四年次報告によれば、加藤は「この地方の師範学校の卒業生」であり、「秋に男子校に入って、英語を勉強すると同時に神学コースを取るはず」のものであった⁸⁾。『写真で見る新潟教会の歩み1886-1986』には、加藤が新潟市西大畑出身、新潟学校師範学科を出て小学校の教師をしていた時代に、妻とともに成瀬仁蔵から受洗したとある⁹⁾。以上のことは『自伝』の記述を裏づけるものである。加藤はニューエルが新潟に着任するまでに、すでに宣教師に注目された人材であり、同志社への入学も囑望された人物であったことがわかる。

加藤は1889（明治22）年2月に同志社神学部に在学した¹⁰⁾。加藤がニューエルのもとにいたのは、『自伝』には1889（明治22）年の夏とあるが、正確には1888（明治21）年の夏までであったと考えられる。

その後、加藤は丹波亀岡に移動し、1892（明治25）年には「身体の休養を兼ね九州宮崎へ転任せらるゝ」とある¹¹⁾。また同じ時期、「丹波亀岡の伝道士加藤馨之助氏はクラーク氏

の日本語教師として近々来着せらるゝ由」との報告もある¹²⁾。加藤は、同志社に行った後、丹波亀岡で伝道をし、その後、宮崎に向かったことがわかる。理由は、休養や日本語教師としての要望など確定できないが、クラーク（Cyrus Alonzo Clark）の日本語教師としても招かれていることは、伝道師だけではなく、日本語教師としての力量が評価されていたと考えられる。

加藤はその後、1893（明治26）年11月に延岡組合基督教会の主任教師に就任し、1906（明治39）年2月まで務めている¹³⁾。そして、以下のような私設の学校を開設した¹⁴⁾。

「小生事昨春以来私立学校開設して天真社と称し目下生徒三十五名有之候。

今月一日より実業部を設け先づ活版部を開き地方の為め活版印刷業相始め候。教師として職工三名を傭聘し生徒五名実習為致居候。又日州独立新聞の支局を担当し新聞配達広告の取継致し配達は生徒三名を使用し貧学生に幾分の学資を得せしむる企に御座候。婦人社会の為め婦人倶楽部を組織して毎月一回集会相開き居候。又昼間勉学の違なき子弟の為に毎週三夜々学会を開きて英漢数の三科教授致居候。」

教会の集会は安息日の説教に十名位より二十名位迄の会衆有之候。何分にも保守的思想大勢を制し勇ましき進歩は相見へ不申候得共漸々光輝を及ぼし居候事と信じ申候。」

この記事から、加藤が1902（明治35）年の春頃に「天真社」という名の学校を創設したことがわかる。内容は主に郵便事業であり、婦人会、夜学会なども行っていた。具体的な内容は明確にならないが、婦人、苦学生、労働者を対象とする学校であり、キリスト教の普及に関連した学校であったと考えられる。

加藤は元来小学校教員であったが、キリスト教に入信してからニューエルの日本語教師となった。日本語教師としての能力もかわれていたが伝道者としての道を歩み、最終的には再び学校の教師としてキリスト教普及のために社会改革に専念した人物であった。

②小野鈴蔵

ニューエルは、D. スカダー（Deremus Scudder）から小野を受け継いだ¹⁵⁾。小野は、仏教徒として育てられ、中国の古典や仏教に通じ、独学ですべての仏教徒の知識を持った人物であった。仏教学校で漢文の教師であったとき、スカダーの影響下でキリスト教徒になったという。

ニューエルは次の三年間、日本語の読本、一般的な会話、慣用的なフレーズ、文法学習、説教や話の準備や記憶に専念した。ニューエルのまわりには、仏教の本や中国の古典があふれていた。小野はニューエルに論語、孟子、大学、中庸と仏教に関する講義をした。ニューエルは仏教に深く自然と興味をもったという。小野はニューエルが公衆で日本語を話した時はいつでもそれを記録し、ニューエルの成功や失敗を正確に評価して、文法や発音などすべての過失を明らかにした。そしてそれらをすべて訂正し、記憶するための慣用語句の新しいリストをつくってニューエルに与えた。

ニューエルは1892（明治25）年に新潟から長岡に移るときに、前橋のアメリカ監督派ミッションのパットンに小野を紹介した。パットンは優れた日本語教師を探しており、数年間小野を雇い、アメリカに戻る時に、京都の主教のパートリッジに小野を紹介した。小野は、パートリッジ、タッカー、ニコルスの三主教のもとで仕えた。小野なくして教会の仕事はできないとまで言われていた。そして1938（昭和13）年まで壮健でいたという。

『自伝』の記述は以上のとおりである。そこで他の資料と照合していこう。『新潟教会史』によれば、小野は新潟第一基督教会と新潟一致教会が1889（明治22）年に合併する頃、新

新潟第一基督教会の安息日学校の校長となった¹⁶⁾。また両教会の合併時には四名の執事のうちの一人に選ばれた。5月には、五泉の講義所に行くなど、教会の仕事にも携わっている。小野は、1885（明治18）年にアメリカン・ボード宣教師として新潟に派遣されていたスカダーが、1889（明治22）年に帰国するまでの日本語教師であったと考えられる。当初スカダーは松坂出身で天満教会員の酒井貞躬を日本語教師としていた¹⁷⁾。スカダーは大阪から新潟まで酒井を日本語教師として同伴してきたことになる。しかしその後、経緯は不明であるが、小野を日本語教師としたようである。

ニューエルはスカダーから小野を受け入れ、その後小野は、アメリカ監督派教会で雇われた。小野は、1903（明治36）年、1908（明治41）年、1913（大正2）年、1917（大正6）年、1923（大正12）年、1926（大正15）年には京都聖三一教会の教会委員であり、1927（昭和2）年3月に一家して下鴨基督教会に転会した¹⁸⁾。下鴨基督教会堂は1926（大正15）年に落成したが、小野夫妻は教会の開設前からこの教会に関与しており、1928（昭和3）年には同教会の教会委員となった¹⁹⁾。

『自伝』によれば、ニューエルはパットン（J. Lindsay Patton）が前橋にいたときに小野を紹介したという。パットンは1899（明治32）年9月に京都聖三一教会の第二代主任司祭となった（1905年7月まで）。小野はその後、1900（明治33）年2月から1911（明治43）年5月まで初代京都地方部主教パートリッジ（Sydney Catlin Partridge）、1912（大正元）年3月から1923（大正12）年まで第二代主教タッカー（Henry St. George Tucker）、1925（大正14）年10月から第三代主教ニコルス（Shirley Hall Nichols）のいる間、京都聖三一教会で勤めた。

小野は、仏教徒からキリスト者になった後、日本語教師としての能力を高く買われ、教派を超えて生涯をキリスト者として尽力していった。当時の宣教師たちは、個人的な紹介によって、教派の枠に関係なく日本語教師を雇い、教会の仕事に携わらせていたことがわかる。

③大宮季貞

ニューエルは1892（明治25）年に新潟へ移動した²⁰⁾。新潟で学校（北越学館）再建問題が起こった時にも独学で日本語学習を続けていた。そのうちに、日本語学習だけでなく、秘書と牧師と福音の仕事ができる人物が必要となった。大宮は同志社神学校卒業生であり、福井の教会で牧師をしていた時、組合教会の本部と仕事の方法や政策について不幸にも争いをおこし、辞職して長岡の近くの与板に帰省し、本屋を始めようとしていた。ニューエルはさっそく大宮を助手に採用した。大宮はその後、新潟教会の牧師になり、Y.M.C.A.を組織した。『北越評論』という機関誌も編集し出版した。ニューエルは、大宮のことを素晴らしい牧師、物書き、教師、秘書と評している。数年後、ニューエルは休暇のあと、大宮を京都のラーネッド（Dwight Whitney Learned）に譲った。大宮は、『新約聖書』の注釈書の改訂の助手として尽力し、1928（昭和3）年の完成までラーネッドとともにいたという。

以上が『自伝』の記述である。大宮の略歴については、竹中正夫による「大宮季貞 略年譜」が詳しい²¹⁾。大宮は1866年1月に新潟県三島郡与板に生まれた。1881（明治14）年に同志社英学校に入学し²²⁾、ラーネッドに英学校時代に教えを受けた²³⁾。『自伝』には同志社神学校卒業生とあるが、実際には大宮は1886（明治19）年に同志社を中退したようである²⁴⁾。

その後大宮は、日本基督伝道会社の派遣によって、1888（明治21）年から1890（明治23）

年まで福井で牧師をし、同年11月から1891（明治24）年4月まで長岡教会の伝道・牧会にあたった。そして1893（明治26）年10月からニューエルの協力者として新潟港一帯の伝道と、沼垂町の開拓伝道を行い、講義所を設立した。

1894（明治27）年5月から1901（明治34）年1月までの六年八ヶ月、新潟教会の第五代牧師をした²⁵⁾。1904（明治27）年3月には恩師ラーネットの招きで京都に移動した。京都では、1907（明治40）年には今出川教会（現、洛北教会）を創設し、初代牧師に就任した²⁶⁾。そして1910（明治43）年10月に按手礼を受けて、1912（明治45）年の5月まで牧師を務めている²⁷⁾。

大宮は単に日本語を教える教師ではなく、教会の牧師の仕事や秘書や福音の仕事も併せてできる日本語教師であった。大宮がニューエルの日本語教師をした期間は、1896（明治29）年5月からニューエルが休暇に入ることから、1893（明治26）年から1896（明治29）年までということになる。大宮は同志社で学び、ニューエルに出会う前に福井や長岡で伝道師の経験もあった。その後、ニューエルの日本語教師をしながら、教会の仕事や出版事業など、キリスト教思想の普及にも携わった。ニューエルは休暇の前に、同じミッションのラーネットに大宮を譲った。大宮は同じ教派のなかで日本語教師、出版事業、聖書の注釈など、多方面で日本語の能力を発揮した人物であった。

④今泉真幸

『自伝』によれば、ニューエルは休暇から戻り、大宮の代わりの秘書と助手の役割を果たす人物が必要になり、新発田教会で伝道者の一人である今泉を見つけたという²⁸⁾。今泉は異なる場所で何年か働いたあと、何も明らかな進歩もなく落胆しあきらめていた。そこをニューエルが勧誘した。

今泉は同志社英学校と神学校の卒業生であり、後に同志社と新潟女学校で成功した教師である。女学校廃校後も牧師として仕事を引き継いだ。新潟と越後で仕事をしていた数年間、ニューエルは今泉と一緒に仕事をし、今泉はニューエルの説教の準備や福音事業を大いに助けた。田舎の教会や遠い地方にもニューエルとともに伝道した。また町のY.M.C.A.もニューエルらと先導していき、雑誌の編集もした。『北越評論』は大宮によって始められ、今泉のときに全盛期を迎えた。

その後、小崎弘道が今泉の著作に引きつけられた。今泉は小崎の教会で編集の仕事に携わるようになった。小崎は今泉を東京に誘い、彼の仕事と提携することになった。数年後今泉は、1909（明治42）年に神戸の多聞教会の牧師として呼ばれ、組合教会の傑出した先導者の一人となった。1938（昭和5）年までの二十九年間、同教会に勤め、組合教会の議長にも選出され、すべての信用をえたという。

それでは別の資料から今泉の履歴を辿っていこう²⁹⁾。今泉は、1871（明治4）年9月13日に新潟県に生まれた。1884（明治17）年に英語塾で学び、87（明治20）年に同志社英学校に入学した。88（明治21）年に同志社教会で受洗。1891（明治24）年に同志社普通学校を卒業し、新潟の北越学館教師となった。その後、学校の廃校とともに再び同志社に戻って神学を学び、1896（明治29）年に同志社神学校を卒業した³⁰⁾。『自伝』によれば、今泉がニューエルのもとにきたのは、ニューエルの休暇の後ということなので、1897（明治30）年である。今泉は1898（明治31）年10月に『北越評論』を創刊し、主筆として活躍した³¹⁾。また小崎弘道の『東京毎週新誌』の編集にもあたった。1904（明治37）年に同志社に招かれ、同志社神学校で倫理学、英書講読を担当した。1909（明治42）年10月に按手礼を受けて、多聞教会の牧師に就任した³²⁾。1918（大正7）年からは日本組合基督教会の理事、副

会長，理事長，総会議長，教師会長を歴任した。晩年は，日本聖書協会の理事長として口語聖書の完成のために貢献した³³⁾。

今泉は多数の著作を執筆しており，なかでも翻訳書はジー・エチ・パーマー著『倫理界』（警醒社書店，1903年），フオルサイス著『聖なる父』（日本基督教青年会同盟，1908年），ボルデン・バウン著シドニー・ギュリック共訳『人格的宇宙観』（教文館，1912年），ウィリヤム・アダムス・ブラウン著シドニー・ギュリック共訳『基督教要義』（博文館，1912年）などがある。

ニューエルにとって今泉は，日本語教師だけでなく，自らの福音事業の右腕のような人物であった。今泉の経歴をみると，彼の執筆能力や翻訳能力は，非常に優れており，ニューエルが伝道師のなかでもかなりの日本語能力を有した人物を雇っていたことがわかる。今泉は，生涯を牧師としての仕事と，日本語の能力を生かした文書伝道を行っていた人物であった。

⑤樋口 貫

今泉がニューエルのもとを去った後，ニューエルは京都の友人と相談するなかで樋口を雇うことになった³⁴⁾。樋口は同志社神学校を卒業後，悪名高く辺鄙な場所にあった小さな教会の仕事を命じられた。彼は実践経験なしにその仕事を引き受けたが，辞める決意をして生まれ故郷に戻っていた。当時樋口は落ちぶれており，そのときにニューエルは京都の友人から樋口を勧められた。樋口は個人的な秘書，日本語教師，雑誌編集の仕事の助手としてニューエルのもとに来た。樋口にはどんな場合でも祈りを求めないという条件がついていた。しかし，ニューエルと仕事をするなかで樋口は牧師として再生されていき，中條教会の牧師になった。

その後樋口は，小崎がサンドイッチ諸島の日本人教会で牧師を求めていることを知り，これを受け入れ，1906（明治39）年にハワイのヒロ教会の牧師になったという。

樋口については，北村健司による「故樋口牧師履歴」が詳しい³⁵⁾。樋口は1869（明治2）年に兵庫県出石に誕生した。1890（明治23）年4月に京都府相楽郡で高等小学校英語専科教師となり，宣教師のもとで英語を学ぶうちにキリスト教にふれ，1891（明治24）年5月に松山高吉から受洗した。1892（明治25）年9月に同志社神学校に入学し，96（明治29）年に卒業した。同年4月には，滋賀県大津町基督教会の主任伝道師となり，1898（明治31）年11月に新潟市の古町基督教講義所の伝道師になった。1898（明治31）に創刊された『北越評論』では，樋口は印刷人になり³⁶⁾，今泉とともに同誌の編集に尽力した。1899（明治32）年7月の初旬になると，樋口は「病氣保養旁避暑の爲め」北海道に向かった³⁷⁾。そして1900（明治33）年10月には中條教会に着任し，1904（明治37）年10月まで勤めた。1904（明治37）年には，ハワイのプウネネ教会の牧師に就任し，1906（明治39）年3月に按手礼を受けた。同年4月にはヒロ教会の牧師となり，1933（昭和8）年10月に昇天するまで，同教会の牧師として奉仕した。

樋口は，小学校教員からキリスト者となり，生涯を伝道者として生きた人物であった。ニューエルと出会い，一度は落胆していた伝道者としての道を再出発することになった。ニューエルの日本語教師になったのは，新潟にいた1899（明治32）年7月初旬までであったと考えられる。

⑥朝比奈藤男（西内天行）

『自伝』には次のように記述されている。樋口が去った後，ニューエルは，一，二の教会のメンバーを代役にしたが，ついに入信したばかりの朝比奈を得ることができた³⁸⁾。朝

比奈は仏教徒の家庭に生まれたが、早くに孤児になった。小学校に入り、一度は仏教の僧侶になろうと思っていた。彼は多くの仏教の本を読み、仏教の講師になった。その後彼は、富山県の政治家の護衛をしていたが、彼の死後、浪人としてさまよっていた時に、新潟の教会でニューエルに出会った。朝比奈はかなりの読書家であった。ニューエルは仏教に興味を持っていたので、朝比奈と宗教に関する話をしたという。

数ヶ月後、ニューエルは朝比奈に仕事がないので、彼を勧誘した。その時から、朝比奈はニューエルの忠実な助手となった。教会の礼拝に出席し、聖書の勉強をし、牧師の仕事をこなしたり、日本語の手紙を書くなどして、ニューエルを助けていった。朝比奈は同志社に入る準備をしようと感じるまで、ニューエルのもとにいた。

朝比奈はその後神学校を卒業し、1905（明治38）年に牧師として命じられ、1938（昭和13）年まで長い間実りある奉仕活動をした。朝比奈は結婚して養子となり、朝比奈の名から西内藤男になった。彼は二宮尊徳に関心をもち、二宮に関する執筆と講義に多くの時間を捧げた。牧師としての仕事の他、町のY.M.C.A.の夜学校のクラスをもっていた。この学校は公立学校からの生徒に対して雑誌やカリキュラムによって聖書を教えるクラスであった。また郵便、電話などの役所、銀行、他の商業の会社に勤める人々や、田舎の人々に対する仕事は、往復文書や訪問の両方によって続けられた。

朝比奈の履歴については、『天上之友』第3編に詳しい記載がある³⁹⁾。朝比奈は1872（明治5）年11月に福井で生まれ、1894（明治27）年に新潟教会で受洗した。1898（明治31）年に丸亀教会主任伝道師、1902（明治35）年に神戸教会伝道師、1904（明治37）年に福岡教会伝道師に就任した。1905（明治38）年に10月に按手礼を受け、同年、岡山伝道会牧師となり、1909（明治42）年には高鍋教会牧師に就任し、岡山孤児院茶臼原分院のチャプレンを兼務しながら石井十次の仕事を助けた。その後、1918（大正7）年に旭東教会牧師、1920（大正9）年には神戸教会副牧師に就任し、四年間働いた。1930（昭和5）年には真岡教会に赴任し、1931（大正6）年には再び旭東教会の牧師に就任。1937（昭和12）年に辞任し、1947（昭和22）年に生涯を閉じている。

『自伝』によれば、朝比奈は同志社神学部卒業と記述されているが、実際に朝比奈が在学したのは、1897（明治30）年10月に開校された福音学館（Gospel School）である⁴⁰⁾。『北越評論』にも、「同氏には先頃福音学館を退学せられ一時平安教会にて働き居られしが今回丸亀教会に赴任せらるゝ由」とあり⁴¹⁾、朝比奈が福音学館に在籍したことがわかる。そして同校を卒業せずして、丸亀教会に赴任したのである。

朝比奈は西内天行の名で、『地方革新講話』（一二三館、1911年）、『地方之革新』（皇道会出版部、1911年）、『信天記：石井十次詳伝』（警醒社書店、1918年）、『孤児の父石井十次の生涯と精神』（教文館、1944年）などを執筆した。丸亀教会に在職中は、地元の『讃岐新聞』の政治、社会、風教、文学について評論を書くなど⁴²⁾、文才を発揮している。

朝比奈がニューエルのもとにいたのは、『自伝』によると樋口が去って、彼が同志社に行くまでのことらしい。朝比奈が新潟にいた1894（明治27）年から1897（明治30）年ぐらいのことになる。そうするとこの時期は、ニューエルは樋口や今泉を雇っていた時期と重なる。ニューエルの書簡を調べると、1895（明治28）年に朝比奈のことについてふれており、沼垂で自分の仕事を助けていたと記述されている⁴³⁾。このことから、1895年頃、ニューエルの日本語教師をやっていたと考えられる。

朝比奈は文筆力に非常に優れており、ニューエルはそうした人物を日本語教師として雇った。朝比奈の方もニューエルと出会ってから本格的に伝道師としての仕事を再開するよ

うになった。朝比奈は按手礼を受け、牧師としてその生涯を全うする傍ら、文書伝道にも活躍した。また、廃娼運動、震災救援活動などにも尽力した。

⑦上田義雄

上田は同志社を卒業するや、ニューエルに日本語教師、秘書、伝道助手の牧師として呼ばれ、Y.M.C.A.で仕事をしたり、本屋の経営や会計士、一般雑役夫もした⁴⁴⁾。後に柏崎の教会で牧師となり、生まれた場所である越後で十一年間ニューエルと一緒に働いた。

上田は、新発田の寺院で育てられ、十分な教育をうけた人物であった。僧侶の導きのもとで仏教の経典を学び、一人前の僧侶として生きていた。ニューエルは上田が若い僧侶の時に出会い、上田もニューエルを知っていたが、接触したのはその数年後のことであった。上田は仏教徒でありながら教典のなかで受けられないことがあり、その弱点を克服するために『新約聖書』の勉強を始めた。そして旅をしながら、悟りの日を待っていた。

上田は横浜の叔母に織物を習い、絹織物職人としての仕事を見つけるために、まず若松に戻り、結局は生まれ故郷の越後に戻ってきた。そして五泉の絹織物のセンターで仕事を見つけた。ニューエルが月に一回の奉仕で教会を訪ねると十五名の若者グループが集まっていた。そのグループの先導者が上田であった。上田はニューエルから受洗した。職人としての上田は、監督者として選ばれた。絹の五泉ブランドは日本市場で高い相場を持つようになった。ニューエルは同志社に行く準備として、上田に聖書の教育をはじめ英語を教えた。

その後上田は同志社に行き、試験に通って神学校に入学し、卒業後に新潟に戻りニューエルの七番目の教師、秘書、助手となった。その後、牧師不在の柏崎教会から牧師としての声がかかった。

ニューエルは1904（明治37）年に松山に移動した。上田も古町教会の牧師になるために松山にいき、1914（大正3）年まで牧師を続けた。そして次に語学を学ぶために朝鮮の大邱に行った。上田は朝鮮の服とその国の生き方を採用し、自分自身の言語で人々に祈るように求めた。上田は社会の尊敬をえて、崇拜者を多数獲得した。また『社会奉仕』という雑誌も編集した。そして最後には自動車業界に転じた。

以上が『自伝』による上田の記述である。他の資料によれば、1895（明治28）年ごろニューエルは上田と出会っており、上田を同志社神学校に行かせるために十分な資金を集めたいと考えていた⁴⁵⁾。上田は1898（明治31）年5月に朝比奈が在学した福音学館の学生となり⁴⁶⁾、1900（明治33）年7月に卒業した⁴⁷⁾。1922（大正11）年に同志社校友会に入会しているが⁴⁸⁾、正式には福音学館の卒業生である。卒業後の上田は、越後の長岡教会に赴任し、1903（明治36）年10月に柏崎教会の主任伝道師に就任した⁴⁹⁾。その後、1907（明治40）年12月に松山市にある古町教会の主任教師に着任し⁵⁰⁾、1908（明治41）年6月に辞任した⁵¹⁾。

その後については不明であるが、ニューエルの日本語教師になったのは、福音学館を卒業した後、長岡に赴任した1900（明治33）年7月以降ということになろう。

『自伝』にあるように、上田はニューエルと接触して受洗し、ラーネッドなどのアメリカン・ボード宣教師が同志社とは別に立ち上げた福音学館に入った。卒業後にニューエルの七番目の日本語教師となり、ニューエルのもとで働いた。上田は元来仏教徒であったが、宣教師と出会ったことで、キリスト者となり牧師として生計をたてた。言語的センスを生かして雑誌編集も行った。最後にはビジネス界に入るなど、多彩な才能をもった人物であったといえる。

⑧富田 政

ニューエルは1904（明治37）年に新潟から松山に移動した⁵²⁾。富田は前任者のギュリック（Sidney Lewis Gulick）の遺産としてニューエルが譲り受けた。富田は数年間ギュリックの助手をしていた。富田は立派な言語センスをもっていて、執筆が得意であり、新聞や雑誌にしばしば論文を寄稿していた。多くのトラクトやパンフレットの著者であり、良い牧師であり、詩人のような人であった。

富田は松山教会で数年間活動的に牧師をし、後に松山で二番目の教会であった古町教会の牧師となり、生涯牧師を続けた。

富田の履歴については、内田政雄編『天上之友』第2編が詳しい⁵³⁾。富田は、1871（明治4）年12月に松山に生まれた。小学校を卒業する頃から病身であった。1882（明治15）年から松山桃源学舎で漢書を学び、南溟義塾で英漢数を取めた。1889（明治22）年に受験をして小学校教員免許状を得て、尋常小学校の教師となったが病気で退職。1891（明治24）年には電気通信技師となった。しかしこの時も病気のために退職した。富田は1887（明治20）年9月に、松山教会で二宮邦次郎から受洗した。そして愛媛県北條郵便局に勤めていた。

1899（明治32）年に富田は松山に戻り、アーサ・ウィリス・スタンフォード（A.W.Stanford）の日本語教師となり、伝道師となる準備を始めた。松山監獄内の伝道にも尽瘁した。1901（明治34）年6月には西條教会の伝道を担当した。1903（明治36）年1月に松山教会主任伝道師に着任し⁵⁴⁾、第二代松山教会牧師となった。1904（明治37）年7月からは、古町教会の創設にあたり、同教会の主任伝道師を兼任した。1906（明治39）年3月、松山教会を辞職し大阪の九條教会の主任伝道師となるが、1907（明治40）年1月に病気のために辞任した⁵⁵⁾。この頃、ギュリックの著作事業の補佐をしながら、同志社神学校の聴講生となった。

1913（大正2）年6月、富田は郡中教会の主任伝道師となり、1919（大正8）年4月に辞職した。1920（大正9）年1月に古町教会の主任伝道師に就任し⁵⁶⁾、1921（大正10）年11月に、郡中教会を兼牧した⁵⁷⁾。同年7月、富田は日本組合教会伝道師の承認を受け、1922（大正11）年10月に按手礼を受けて古町教会の牧師となった⁵⁸⁾。そして1929（昭和4）年3月に退職し、1930（昭和5）年2月に生涯を閉じた。

ニューエルは1904（明治37）年9月に来松し⁵⁹⁾、1906（明治39）年5月に帰米することから⁶⁰⁾、富田がニューエルの日本語教師をした時期は、ニューエルの来松後である。

富田は漢学の素養もあり、小学校教員の経験もあった。病身の故、キリスト教に入信するが、スタンフォード、ギュリック、ニューエルの三人の日本語教師をこなした。彼自身は、実践から伝道者としての道を切り開き、按手礼を受けて牧師になった。『生の望みと死の慰め』（興文協会、1922年）を執筆するなど⁶¹⁾、文書伝道も試みた人物であった。

⑨縣 豪

富田が牧師として忙しくなった時、ニューエルは、放蕩生活で財産を食いつぶした一人の若者を雇った⁶²⁾。縣は以前はビジネスに没頭していたが、次第にキリスト教の奉仕に自らを捧げるようになった。ニューエルは縣が同志社セミナーに行くための支援をした。卒業後、縣はニューエルたちのところにもどり、郡中教会で牧師になり、そこで尽力した。数年後、北海道のかなり北の方に牧師として赴いたが、難しい土地のなかで落胆していった。そして最後には最初の家に戻り、再びビジネスの世界に入ってしまった。

縣に関する資料は少なく、『自伝』が語るように縣が同志社に進学したという形跡は認め

られない。しかし別の資料によると、縣は1905（明治38）年4月に今治教会伝道師に就任（1906年5月まで）⁶³⁾、1906（明治39）年5月には郡中教会の主任教師に着任した⁶⁴⁾。その後、1907（明治40）年6月に小松教会主任伝道師（1911年3月まで）となり、西條教会の主任教師を兼任した（1912年9月まで）⁶⁵⁾。

縣がニューエルのもとに来たのは、『自伝』によれば、前の日本語教師である富田が忙しくなった頃とあるが、富田はニューエルが来松する前の1904（明治37）年7月から古町教会と松山教会を兼任しているので具体的にいつからか判明しない。ただし富田は1906（明治39）年3月に松山教会を辞して上阪したので、1906（明治39）年5月にニューエルが帰米するまで、縣はニューエルの日本語教師であったと考えられる。しかし縣は、1905（明治38）年以降、伝道師であったことを考えると、ニューエルの日本語教師をした時期はそれより前ということになる。ニューエルが松山にいた時期は十八年のため、最初は富田が日本語教師をしていたが、忙しくなった時に縣を雇ったという『自伝』の記述が正確なところであろう。縣はニューエルに出会ったことを機に、キリスト教に傾倒し、伝道師になる道をめざした。しかし最後には挫折し、ビジネスの世界に入ってしまった。

⑩米本重太郎

ニューエルは1923（大正12）年に朝鮮の京城に移動した。米本は同地でニューエルが秘書と助手が必要になり雇われた人物である⁶⁶⁾。米本は、同志社神学校を卒業し、朝鮮の大邱教会などで伝道をしていた。ニューエルのもとへ来た当時は、伝道から退いてY.M.C.A.の仕事を手助けしていた。

1930（昭和5）年に朝鮮を去る時、ニューエルは長老派の宣教師の友人であるカー（William C. Kerr）に米本を紹介した。カーは日本語の仕事で助手を必要としていた。米本は言語の才能があったので雑誌の編集者もしていた。

米本の履歴については、『天上之友』第3編に詳しい⁶⁷⁾。米本は1882（明治15）年4月に岡山県笠岡に生まれた。同志社には神学校の別科に1901（明治34）年に入学した⁶⁸⁾。その後、1903（明治36）年に第一学年⁶⁹⁾、1904（明治37）年に第二学年に在籍したことが確認できる⁷⁰⁾。しかし卒業をしたかどうかは判明しない⁷¹⁾。

米本はその後、1913（大正2）年12月に大津教会の主任伝道師（1914年4月に辞任）に就任した⁷²⁾。そして1915（大正4）年4月に韓国の大邱教会の主任伝道師に着任した⁷³⁾。しかし1920（大正9）年10月に辞任し、京城英彰中学校教師になった。1945（明治20）年8月以降は、終戦による引き揚げ業務に携わり、翌年4月に京都に戻った。1950（昭和25）年に大阪キリスト教社会館、1952（昭和27）年4月に同志社女子大学学生寮に勤務し、1964（昭和39）年8月に永眠している。

以上のことから、米本がニューエルのもとに来たのは、大邱教会の仕事を辞めて京城英彰中学校教師の頃だと考えられる。当時の職は教員であったが、すでに伝道者の経験があり、組合教会に関連した人物であった。雑誌を出版するなど言語能力にも長けていたと考えられる。

4. 考察

以上、ニューエルの『自伝』を主資料にして日本語教師について分析してきた。最後に、ニューエルの日本語教師のリクルートのあり方と、日本語教師の人物像について考察していこう。

4.1 リクルートの方法

まず第一に、十名はほぼ同志社で学んだ人物である（【表3】参照）。

【表3】日本語教師になる前後の経歴

氏 名	日本語教師になる前後の経歴
①加藤馨之助	日本語教師→1889年2月同志社神学校在学
③大宮季貞	1881年同志社英学校入学、1886年中退→日本語教師
④今泉真幸	1887年同志社英学校入学、1891年同志社普通学校卒、 1896年同志社神学校卒→日本語教師
⑤樋口 貫	1892年同志社神学校入学、1896年卒→日本語教師
⑥朝比奈藤男	日本語教師→1897年福音学館在学
⑦上田義雄	1898年福音学館在学、1900年卒業→日本語教師
⑧富田 政	日本語教師→1907年頃同志社神学校聴講生
⑩米本重太郎	1901年同志社神学校別科入学、在学→日本語教師

彼らは同志社→日本語教師（③④⑤⑦⑩）と日本語教師→同志社（①⑥⑧）の二つのルートでニューエルと接触している。ニューエルの日本語教師は、大半はアメリカン・ボードならびに組合教会の教派（会衆派）のなかで生きた人物である。ニューエルは日本語が上達していくにつれ、単なる語学教師としてだけでなく、福音事業の助手ができる人材を必要とした。したがってすでに同志社を卒業し、伝道活動をしていた人物をニューエルは日本語教師として雇った。求人の方法は人伝であり、伝道地における現地調達である。また十名のうち、③大宮季貞、④今泉真幸、⑤樋口貫、⑥朝比奈藤男、⑧富田政の五名は按手札を受け、後に牧師となった。ニューエルは伝道者としても傑出した人材を日本語教師として獲得していたことがわかる。

さらに、③大宮季貞、④今泉真幸、⑤樋口貫、⑥朝比奈藤男、⑦上田義雄、⑨縣豪は、ニューエルと出会う以前は、伝道活動に挫折するなど、人生において困難な状況にある者たちであった。彼らはニューエルの日本語教師になった後、牧師としても人間としても再生された経緯を辿っている。また【表3】のように、①加藤馨之助、⑥朝比奈藤男、⑧富田政は、日本語教師になってから伝道師になるために同志社で学んでいった人物である。日本語教師の獲得は、組合教会派の伝道師養成にもつながっていたと考えられる。

4.2 人物像

次に日本語教師の人物像について考えてみよう。判明している限り、彼らの生年は、③大宮季貞1866年、④今泉真幸1871年、⑤樋口貫1869年、⑥朝比奈藤男1872年、⑧富田政1871年、⑩米本重太郎1882年である。彼らは近代の学校教育制度による教育を受けた経歴のある人物である。①加藤馨之助と⑧富田政は小学校教師、⑤樋口貫は高等小学校教師、④今泉真幸は北越学館教師、⑩米本重太郎は中学校教師など教師の経験をもっている。さらに、②小野鈴蔵、⑥朝比奈藤男、⑦上田義雄は、元米仏教徒であり、仏教や漢学に通じていた。⑧富田政も私塾で漢学を学んだ経歴がある。宣教師の日本語教師に、仏教や漢学がベースにあったことは注目できよう。

最後に、日本語教師がニューエルとともにいた時期は、平均すると二年から三年ぐらいの間であるが、どの人物も日本語教師だけを専門には続けていないことがわかる。ただし、①加藤馨之助はクラーク、②小野鈴蔵はスカダー、パットン、聖三一教会主教たち、③大

宮季貞はラーネッド，⑧富田政はスタンフォード，ギュリック，⑩米本重太郎はカーなど，ニューエル以外の複数の宣教師の日本語教師をしたものもいた。ニューエルは，その都度同じ教派の日本人キリスト者を人伝に雇っていった。ニューエル側の評価からみると，彼らは日本語教師としていずれも有用な人材であったし，福音事業においても宣教師の右腕として大きな役割を果たした。そして語学教師としてだけでなく，伝道師，出版事業，出版伝道，社会事業などを通じて，日本におけるキリスト教思想の普及に尽力した人物であった。

注

- 1) 日語学校については，拙稿「日語学校創設に果たした在日宣教師の役割」『キリスト教社会問題研究』第53号，同志社大学人文科学研究所，2004年，31-52頁，参照。
- 2) 拙稿「宣教師の日本語教育 ―一八九〇年までのアメリカン・ボード宣教師を中心に―」同志社大学人文科学研究所編（同志社大学人文科学研究所研究叢書XXXVⅡ）『アメリカン・ボード宣教師―神戸・大阪・京都ステーションを中心に，1869～1890年―』教文館，2004年，359-387頁，参照。
- 3) H. B. Newell, *Autobiography of Rev. Horatio Bannister Newell*, D.D. 1861-1943. 執筆年不明，Otis Cary旧蔵。『自伝』については，北垣宗治が2005年6月17日に開催された同志社大学人文科学研究所第二研究会において「H.B.ニューエル宣教師の自伝について」と題して発表している。『自伝』の書誌学的内容については，同氏の「ニューエル宣教師の自伝」（『敬和学園大学研究紀要』第15号，2005年3月）を参照されたい。
- 4) H. B. Newell to N. G. Clark, Niigata, Japan, Oct.31-1887. (American Board of Commissioners for Foreign Missions, *Papers of the American Board of Commissioners for Foreign Missions*, Unit 3. Missions to Asia, 1827-1919. 以下，『アメリカン・ボード宣教師文書』と略記する。)
- 5) 前掲3)，104頁。
- 6) 本井康博・西八條敬洪編『長岡教会百年史』日本キリスト教団長岡教会，1988年，66頁。
- 7) 加藤については，前掲3)，104頁。
- 8) Report of the North Japan Mission from August 1st 1886 to June 30th 1887, p.17. (前掲4)，『アメリカン・ボード宣教師文書』)
- 9) 本井康博編『写真で見る新潟教会の歩み1886-1986』日本キリスト教団新潟教会，1986年，21頁。
- 10) 「同志社大学設立募金日誌 付社員会記録」（明治二一年四月一二日～明治二二年一月二七日）上野直蔵編『同志社百年史』資料編一，同志社，1979年，201頁。
- 11) 一信徒報「丹波亀岡近報」『基督教新聞』第479号，1892年9月30日，4頁。
- 12) 大藤重賢「日向通信」『基督教新聞』第480号，1892年10月7日，4頁。
- 13) 高橋虔「日本組合基督教会年表（後編）」『キリスト教社会問題研究』第18号，1971年，221頁。
- 14) 加藤馨之助「日向延岡だより」『基督教世界』第1061号，1903年12月24日，12頁。
- 15) 小野については，前掲3)，104-105頁。
- 16) 『新潟教会史』第一巻，著者，発表年とも不明。新潟日本基督教団教会所蔵。

- 17) 茂義樹編『澤山保羅全集』教文館, 2001年, 810-811頁。
- 18) 日本聖公会京都地方部編刊『日本聖公会京都地方部歴史編纂資料』出版年不明, 19頁, 21-22頁, 25-27頁。
- 19) 同上, 91-92頁。
- 20) 大宮については, 前掲 3), 105-106頁。
- 21) 竹中正夫「大宮季貞 略年譜」『良寛とキリスト—大宮季貞の生涯をたどって—』考古堂, 1996年, 200-201頁, 参照。
- 22) 大宮季貞「追想新島先生」同志社社史資料室編刊『追悼集Ⅱ—同志社人物誌 明治四十一年～大正四年—』1988年, 219頁。
- 23) 住谷悦治『ラーネッド博士伝—一人と思想—』未来社, 1973年, 64頁。
- 24) 大宮は1895(明治28)年に同志社校友会に入会しているが, 正式には卒業はしていない(同志社校友会編刊『同志社校友会名簿』1993年, 1955頁)。
- 25) 日本基督教団新潟教会編刊『聖業七十年の歩み—日本基督教団新潟教会略史—』1956年, 60頁。
- 26) 前掲13), 231頁。
- 27) 前掲13), 237-239頁。
- 28) 今泉については, 前掲 3), 106-107頁。
- 29) 履歴については, 日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』教文館, 1988年, 132頁。
- 30) 前掲24), 1952頁。
- 31) 高橋虔「日本組合基督教会年表(前編)」『キリスト教社会問題研究』第16・17号, 同志社大学人文科学研究所, 1970年, 270頁。
- 32) 前掲13), 234頁。
- 33) 同志社教会編刊『同志社教会九十年小史』1966年, 137頁。
- 34) 樋口については, 前掲 3), 107-110頁。
- 35) 北村健司「故樋口牧師履歴」『故樋口牧師二周年記念誌』ヒロ日本人基督教会, 1935年, 国立国会図書館所蔵。
- 36) 「奥付」『北越評論』第1号, 1898年10月10日。
- 37) 「樋口氏の北海道行」『北越評論』第10号, 1899年7月10日, 27頁, 「教界近事」欄。
- 38) 朝比奈については, 前掲 3), 94-96, 110頁。
- 39) 「天上の友」刊行委員会編『天上之友』第3編, 基督教世界社, 1988年, 92頁。
- 40) 本井康博『京都のキリスト教—同志社教会の19世紀—』(同志社教会双書3), 日本キリスト教団同志社教会, 1998年, 311頁。
- 41) 「朝比奈藤男氏」『北越評論』1899年2月10日, 26頁, 「教界近事」欄。
- 42) 「讃州通信」『東京毎週新誌』第886号, 1900年8月17日, 14頁。
- 43) H. B. Newell to J.L.Barton, 1895.8.6, 12.28. (前掲4), 『アメリカン・ボード宣教師文書』)
- 44) 上田については, 前掲 3), 110-114頁。
- 45) H. B. Newell to J.L.Barton, 1895.6.13. (前掲4) 『アメリカン・ボード宣教師文書』)
- 46) 前掲40), 311頁。
- 47) 「京都福音学館」『東京毎週新誌』第881号, 1900年7月13日, 17頁。
- 48) 前掲24), 1952頁。

- 49) 『明治四十年日本組合教会便覧』日本組合基督教会事務所, 1907年, 2 頁。
- 50) 『明治四十一年日本組合教会便覧』日本組合基督教会事務所, 1908年, 3 頁。
- 51) 前掲13), 232頁。
- 52) 富田については, 前掲3), 114頁。
- 53) 内田政雄編『天上之友』第2編, 日本組合基督教会教師会, 1933年, 82-85頁を参照。
- 54) 前掲13), 220頁。
- 55) 前掲13), 227頁。
- 56) 前掲13), 254頁。
- 57) 前掲13), 258頁。
- 58) 前掲13), 260頁。
- 59) 日本基督教団松山教会編刊『松山教会九十年略史』1975年, 46頁。
- 60) 日本基督教団松山教会編刊『松山教会百年史稿』1986年, 104頁。
- 61) 前掲13), 260頁。
- 62) 縣については, 前掲3), 114-115頁。
- 63) 前掲13), 225頁。
- 64) 前掲49), 3 頁。
- 65) 前掲13), 229頁。
- 66) 米本については, 前掲3), 115頁。
- 67) 前掲39), 159頁。
- 68) 同志社普通学校『生徒学籍簿』(明治三十六年四月改正) 同志社社史資料センター蔵。
- 69) 『同志社学生名簿』(明治三十六年四月調製) 同志社社史資料センター蔵。
- 70) 『教務用同志社生徒名簿』(明治三十七年四月調製) 同志社社史資料センター蔵。
- 71) 1916年に同志社校友会には入会している(前掲24), 1982頁)。
- 72) 前掲13), 243頁。
- 73) 前掲13), 248頁。